様式（１０）

論文審査の結果の要旨

報告番号	甲　保 第　　６３　号 乙　保	氏　　名	張　林婉
審査委員	主　査　谷岡　哲也 副　査　森　健治 副　査　友竹　正人		

題　　目

Assessment of dyspnea, ADL, and QOL in the perioperative period in lung cancer patients treated with minimally invasive surgery
（低侵襲手術を受けた肺癌患者の周術期における呼吸困難、ADL、QOLの評価）

著　　者

Zhang Linwan, Kazuya Kondo, Takae Bando, Naoya Kawakita, Hiroaki Toba, Yoshie Imai,Hiromitsu Takizawa.
The Journal of Medical Investigation 70: 388-402, August, 2023.

要　　旨

肺癌患者の多くは、ビデオ支援下胸腔鏡手術（VATS）などの低侵襲手術を受けている。本研究は、縦断的記述研究であり、European Organization for Research and Treatment of Cancer-Quality of Life Questionnaire（EORTC QLQ） C-30、QLQ-LC13、がん性呼吸困難尺度（CDS）、肺 ADL（P-ADL）の質問票を用いて、肺がん患者の術後の健康状態および症状の変化について検討した。徳島大学病院で肺切除術を受けた肺がん患者 113 人を対象とした。術前、術後 1、3、6 ヵ月後に EORTC QLQ-C30、QLQ-LC13、CDS、P-ADL を評価した。その結果、身体および役割機能の障害が、術後 6 ヵ月間持続した。症状では、疲労、疼痛、食欲不振、呼吸困難、咳嗽、胸痛が術後 6 ヵ月間持続した。CDS では、努力感、不快感、呼吸困難総尺度の得点が術後 6 ヵ月間上昇した。P-ADL では、ほとんどの ADL（食事、排泄、入浴、化粧、着衣、屋内歩行、階段）が術後 1 ヵ月で障害されていたが、3 ヵ月までには回復した。ADL の呼吸困難指数は、術後 6 ヵ月間低かった。以上より、肺癌患者の手術が、低侵襲であるにもかかわらず、術後 6 ヵ月後の呼吸困難が継続する場合がある。その予防を考慮する医療と看護が必要であることを示している。その社会的な意義は大きく、博士の学位授与に値すると判定した。